

「スノーボール ウォーレン・バフェット伝 上・下」

アリス・シュローダー(著)、伏見威蕃(訳)

日本経済新聞社 2009年11月19日刊

本書は米国で最も成功した個人投資家ウォーレン・バフェットのこれまでの歩みを、詳細に記述した伝記である。しかし、本書はバフェットの人生をたどるだけではなく、1930年代以後の米国現代史をたどるという意味でも興味深いものがある。

伝記を読む楽しみは、専門書から要点だけを理解するのと違い、日常の細部についての本人の考え方や人生の岐路における意思決定の仕方、人との出会いを知ることにある。また、そのような細部まで書き込まれた伝記でなければ、読みごたえはないとも言える。

本書は5年かけてバフェットに密着取材しているだけに、出生から幼少時代、学生時代から駆け出しの投資家の頃、そして最も資産を残した中年以後の経験が上下巻合わせて1400ページの大著の中に事細かに書き込まれている。

経済・経営の観点からおもしろかったのは、50年代よりパートナーを集めて投資を行う職業的投資家の道を自ら選んで、しかもネブラスカ州オマハという田舎町で、主として『ムーディーズ・マニュアル』や『証券分析』『ウォールストリート・ジャーナル』などを読んで、企業分析をして投資を行ってきたという事実である。投資戦略も基本的には、企業資産価値より株価総額が相対的に低く、したがって投資家から見放されているような企業を選んで投資するという古典的な投資方法(本書ではこれをシケモク理論と呼んでいる)を重視してきたこと、さらに現代ポートフォリオ選択理論とは逆に、これと決め込んだ企業に集中投資するという手法を取ってきたということである。

90年代に入ってバフェットがソロモン・ブラザーズと関わるようになった時からすでに明らかだったが、2007年から始まった金融危機では、投資銀行や金融機関の中には強欲資本主義に踊らされて、節度や矜持を失ってしまった人びとが多く見られた。それとは対照的にバフェットがいかに健全な社会常識を維持し、かつ人生において重要なことは何かを繰り返し主張し、実践してきたかがよく記述されている。

米国の懐の深さを思い知らせてくれる一冊である。